木魚の顔

長谷川時雨

鼠小僧(ねずみこぞう)の住んでいた、三光新道のクダリに、三光稲荷(いなり)のあったことを書きおとした。三光稲荷は失走人の足止の願がけと、鼠をとる猫の行衛(ゆくえ)不明の訴(うったえ)をきく不思議な商業(あきない)のお稲荷さんで、猫の絵馬が沢山かかっていた。霊験(れいげん)いやちこであったと見え、たま、五郎、白、ゆき、などの年月や、失走時や、猫姿を白紙に書いて張りつけてあった。その近くに鼠小僧の隠れ家があったわけになる。

油町あたりの呉服商の細君であった祖母

が、鼠小僧の人柄などをどうして知っていたのかと思ったら、そのころ祖母夫婦は、楽屋新道（がくやじんみち）――葺屋（ふきや）町、堺町、などの芝居に近い――の附近に住（すま）っていた。場処がらで気らくに暮していたと見え、近所の岡（おか）っ引（ぴき）の細君と仲をよくしていたという。自然そんなことから鼠小僧の引廻しも見たのであろう。

七ツのアンポンタンに、九ツのアンポンタンに、十一、十二のアンポンタンにおぼろげながら近くの町の

人の生活ぶりや身近な人たちのそれがぼんやりとうつってきて、言様(いいよう)のないさびしさと、期望しても期望しても満(み)たされない佗(わび)しさがあった。譬(たと)えて見れば、お正月になったら賑(にぎや)かだろう、――賑かだろうという漠然とした思いのなかに、子供の空想と希望と理想が充満している。それが元旦(がんたん)の夕方ちかくなると、ああ、もう日が暮れるのにと、どうしていいかわからない物足りなさが憂鬱(ゆううつ)をもってくる。それにも似た――事はまるで違うが、日々(ひび)にぶつかる余儀ないさびしさだった。

ある日、あたしは母の父の顔を穴のあくほど凝(じっ)と見

た。この老爺(おじい)さんは寺院(おてら)で見る大木魚(おおもくぎょ)のような顔をしていた。木魚は小さいのは可愛らしいものであるが、大きなのが茵(ふとん)を敷いて座っていると、かなりガクガクとした平たい四角である。老爺(おじい)さんの顔も大きな四角なお出額(でこ)で顎(あご)も張っている。そのくせ鼻は丸く安座(あぐら)をかいていて小さい目は好人物というより、滑稽味(こっけいみ)のある剥身(むきみ)に似た、これもけんそんな眼だ。白い髭(ひげ)が鼻の下にガサガサと生(は)えて、十二月の野原の薄(すすき)のような頭髪が、デコボコな禿(はげ)た頭にヒョロヒョロしている。悪口すれば、侏儒(くもすけ)ともいえる、ずんぐりと低い醜い人だ。

その前にも逢(あ)ったかも知れないが、アンポンタンが意識した初対面の印象だった。彼の身辺(まわり)は石炭酸の香(かおり)がプンプンした。

「ヒョウソになる性(たち)だから、これは働きながらでは無理だ。」

そういって女中を――台所働きの女中をおさんどんと呼ぶころだった。そのおさんが昨日(きのう)足の裏を咎(とが)めたのを気にしないでいたらば、熱が出て腫(は)れあがったのを診察して、養生にかえすようにと言った。

老爺(おじい)さんが洋科のお医者が出来るのも初耳だった。あたしの家は頑固で、漢法医にばかりかかって練薬(ねりやく)だ

の、振りだしだのを飲ませ、外傷(きず)には貝殻へ入れた膏薬(こうやく)をつけさせていたから——洋科の医者といえばハイカラなものと思っていたあたしは、石炭酸の匂いに厳粛になり、この汚ない老爺さんに呆然(ぼうぜん)としていた。

　そのまた老爺さんの言語(ことば)がふるっている。

「長谷川氏(うじ)は元気かな。」

　長谷川氏(うじ)——あたしの父で、彼の婿である。常磐津(ときわず)の師匠の格子戸へ犬の糞(ふん)をぬった不良若衆で、当時でのモダン代言人である。——あたしは、彼のデコボコ頭の凹(ひく)みにたまった埃(ごみ)をながめた。

以下、その老爺さんの生活の断片で、アンポンタンの眼に映(うつ)ったヒルムの屑(くず)である。

すべてのことに転々とする人を見るとさびしい焦燥を他人(ひと)ごとながら感じて、石が汗をかくようなにじみだす涙がこみあげてくる時がある。生れながらの性(さが)もあろうが、ピッタリと、ものに廻りあわぬ悲しい人たちなのである。蚕でさえ心にあうところのあるまで、繭をかける場処を選んで、与えられた木の枝の、果(はし)からはしまで歩き廻る——それは何やら満されない本能の求めなのではなかろうか——老爺さん湯川氏も、自分の本質を空しくして、ただ長く生きた九十年の生涯

である。
老爺さんは、湯川というのも自分の本姓(ほんせい)ではない。仙台屋敷に生れたから仙台様の藩士だろう。お留守居(るすい)役だともきいたが、廻米(かいまい)の事に明るかった。父親もその役だったと見える訳があるから、江戸で生れた東北系の人である。

廻米とは仙台領の米を船で廻してくることで、その領地米を江戸邸(やしき)で受取る役人なのだ。江戸詰の藩士の禄高通り全部米で与えたものなのか。あるいは金に代えて渡したものなのか。よくきいておかなかった。当時の蔵前の札差(ふださし)や、浜方などとの取引関係から、数

算にたけ、世估に長じていなければならない、いわゆる世渡り上手の人物でなければならないのに、湯川氏はみいりのよい父祖の職をきらって御直参の株をかった。直参といえばていさいはよいが、木っ葉旗本、貧乏御家人の、その御家人の株を買って、湯川金左衛門邦純となったのである。湯川という姓は無論買った家の姓で、金左衛門も通り名である。しかも、養父——名ばかりの、御家人株の売手が拾歳下なので、嘘の年齢が出来上ったために、娘たちを妹にして幕府の人別帳に記入して貰い、とにかく御直参にはなった。が、すぐに幕府は瓦解した。株を売った真の徳川御家

人の一人は、先見の明をほこって、小金貸でもはじめたであろうが、みじめなのは、新湯川金左衛門邦純であった。

尤も老爺さんの妻の父親が、上野輪王寺の宮に何か教えていた××安芸守という旗本で、法親王が白河へお落ちになってから建白書のようなものを書いて死んだ人であり、身寄りにも上野の彰義隊で死んだ若ものもあったから、算盤をはじく武士より直参武士になれと進められたのかも知れない。とはいえ新御直参一家は、五月十六日朝の官軍上野攻めで狼狽てた。いよいよ敗軍ときくと逃出す騒ぎで、什器を池のなかに投

込んだり——上野山下の商家では店の穴蔵へ入れたという——井戸へ入れておいたりして逃出した。老爺さんの二女——総領娘はある大名邸（やしき）に御殿奉公をしていた——私の母は九歳だったが、男髷（おとこまげ）にしていたので小刀を差して連れられて逃げた。吉原の土手下で夜を明した時、どこのものかが名物の土手の金（きん）つばをくれたが、その大きさとうまさを何時までも忘れなかったと言った。そうしてこの新御直参一家はみずから没落し、徳川十六代亀之助（かめのすけ）様のお供、静岡蟄居（ちっきょ）というはめにおちた。

品川から出た二艘（にそう）の幕府の汽船に押し積まれて静岡

へまでもつれてゆかれる幾百戸かの家族、それは徳川にしても厄介ものだったに違いない、ついてゆかねばならぬというものの中には、こうした一家もあったのだ。静岡へいったからとて何の当（あて）があるのではなし、百姓泣かせがいちどきに流れこんだのだった。命と体だけを積んでもらった故、勿論（もちろん）たいしたものは持ってゆきはしない、家財はみんな捨てていったのだ——こんな時だとて、上のものの方はどうにかなったであろうが、耕す土地とてそうあろうわけはなし、無禄無扶持（むろくむふち）になった小殿様たちは、三百年の太平逸楽（いつらく）に奢（おご）って、細身（ほそみ）の刀も重いといった連中である。忽（たちま）

ちにして畑の芋盗人となり、奥方は賃仕事をして糊口をしのいだ。

湯川氏の家では不用になった袴が商品に化けた。仙台平や博多の財袋がつくられて売られた。お百姓がお客様なのであるが、売手に怖れて近寄らないのと、売る方でも気まりが悪いので、七夕の星まつりのように篠の枝へ幾個もくくりつけて、百姓の通る道ばたに出しておいて銭に代えた。

幕府の瓦解は御直参と威張った旗本、御家人の墜落ばかりでなく、大名も廃藩置県となったから、湯川の姉娘も帰ってきた。ともかく、わびしさのつづく中に

振り袖姿の年頃の娘を見る事は親たちは嬉しかった。この娘だけが失わずにいた衣装道具を、失わさずにおかせたいと思った。とはいえ用捨（ようしゃ）なく生活（ここう）の代（しろ）は詰るばかりである。それを助けるためにお供の連中は遠州（えんしゅう）御前崎（おまえざき）に塩田（えんでん）をつくれとなった。

あたしの母は十二になって、屈強（くっきょう）な体力をもっていた。姉と妹二人はどうにもならなかった。彼女は小船を漕（こ）いだ。彼女が今でも一番恋しい景色は遠州御前崎の今切（いまぎ）れの渡しのところと味方が原だという。彼女は早抹（あさまだき）、父親をはげまして自ら小船を漕いで塩浜へとゆく。十二の彼女の海水（しお）の撒（ま）きぶりには及ぶものが

なかったほど、終日を働きくらした。

　と姉娘に縁談が起った。親たちは江戸がえりの娘の美しさゆえに――と思った善人である、先方が旗本で、旗本が口をきいてくれたのだからといった具合で悦(よろこ)んだ。仲人(なこうど)が来た。夏のことで白扇(はくせん)をサラリと開くと懐(ふところ)から贈物の目録(もくろく)書と、水引(みずひき)をかけた封金を出して乗せたが、

「芽出度(めでたく)御受納くださるように。」

と丁重に述べておいて、下げた頭をあげると、動作のゆっくりした湯川氏が手をださぬうちに扇の要(かなめ)をくるりと向けかえて、

「御同様に、此方様（こなたさま）からも御贈（おおく）りでござろうから、諸事節約、緊縮（きんしゅく）して――」

とかなんとか浜口内閣のようなことを言って、もってきた結納金（ゆいのうきん）をまた懐中に入れてしまった。それでも好人物な、他人（ひと）を疑うことをしない夫婦は、悦びだけを受入れ、悦びの意だけを空っぽで渡した。

――あたしの母は、今でも言う、姉さんが味方が原の秋草の中を、馬に乗って美しい振袖を着ていった。これはお前にやるよといったものまでみんなもっていってしまった。お嫁にゆくとなったらケチになって、何もかも持っていった。姉さんが御奉公に出たころは、

家も富貴だったので、市ヶ谷のあまざけや（有名な呉服店）で、好（この）みで染めさせたものばかりだったが、私は子供心にもこの嫁入りの仲人が変だと思った。昔のお金は小判で重いのに、包んできた水引のかかった奉書は薄っぺらで軽かった。よっぽどたって嫁入りさきにたずねていったら、連合（つれあ）いも、姑も、姉も、みんながあたしの姉さんの着物を着ていた。

　無力の巧（たく）んだ一種の略奪であった。さすがの御直参湯川氏も考えさせられた。これではならないと働きものの二女を伴（つ）れて江戸へ出た。江戸には住みすてた邸（やしき）もある。池の中には何かしらが残っていよう。深

川佐賀町の廻船問屋には自分の妹が片附いている。商人には障(さわ)りがなかったということが彼を心強くさせもした。

紅葉(もみじ)を踏んで箱根の山も越した。以前の住家(すみか)へゆくと玄関の両側にたてた提灯の定紋(じょうもん)は古びきって以前のままだが、上方の藩の侍が住んでいて、取次の男が眼をむいて睨(にら)んだ。家財なぞしらんと――だが深川の商取引の活潑(かっぱつ)さは昔どころではなく、潑溂(はつらつ)として大きな機運が動いていた。義弟の佐賀町の廻船問屋石川佐兵衛の店では、仙台藩時代の彼の緻密(ちみつ)な数算ぶりを知っていたので手を開いてむかえた。働きものの小娘

は気むずかしい伯母（おば）の小間使（こまづか）いになった。
　だが、人間をあやつる傀儡師（かいらいし）はなんといういたずらをしようとするのか、この湯川氏が、働きものの二女を芸妓に売ろうと思ったり、また、この小娘が未来に教育界の先駆者（せんくしゃ）となろうとしたのをさせなかったり——
——彼女に手習いを教えた女学者が、この子を養って自分の意志をつらぬかせたいと懇望したが許さなかったのだった。
　石川佐兵衛は暗愚でも、時流が廻米、廻船問屋というものを恵んだ。そこに湯川氏の数算と長年の蘊蓄（うんちく）が役に立って石川の家運はあがった。その頃の湯川氏の

知己の名は自毛村であるとか、三野村だとか錚々たる大実業家となった人たちである。石川屋は三井物産前身の如きものだともきいたが、やがて石川屋は没落し、それよりずっと前に湯川氏はまた動きだした。あたしが知った老爺さん湯川氏は、それからずっと後の彼だったのだ。

　あたしの家で——彼のいう長谷川氏の宅で、彼のために小晩餐会が催されたことがある。彼の老妻や、他の娘や、娘たちの婿なども寄りあつまったが、客座敷ではなく常の食事をする室で、各自膳で車座になって

お酒も出た。

「いや、どうも、かくお手厚い御饗応（ごきょうおう）にあっては恐縮のいたりで――」

木魚の顔が赤くなって、しどく豊（ゆたか）に、隠居（いんきょ）じみた笑いを浮べて、目をショボショボさせながら繰返していっていた。

「老爺さん、こんどこそはひとつモノにして下さい、なにしろ君にいためられた皆（みんな）が浮かばないよ。こっちの家（うち）だって、なんだかんだって大変だあね。」

そういったのは姉娘の婿――遠州では仲人にたった旗本だった。

「それは大丈夫だ、こんどはウンと皆をよろこばせる。」
もうその頃は七十位だったのであろうが、遠くへ単独でゆくような様子だった。
「味噌も米も困らないように送ってあるから。」
と彼の老妻はつぶやくようにいった。そしてみんなが何処へか送っていった。
「牛肉の佃煮でも送ってやったら――」
父がその後、母にむかっていっていた。
「だが、今度もあてにはならないぞ。」
そういうふうに彼は二年も三年も漂然といなく

なって、現れるとムッツリとした風貌を示し、やがてまた人々に送られて、至極満足そうなニコニコ顔で出かけた。

　そうした祖父の存在は子供たちからは忘られがちで、外祖母は末の娘と二人で住んでいるものだとばかり思った。上野下の青石横町に住んでいたころも、根岸のお行の松のすぐきわに、音無川の前にいたころもそうだった。老嬢になった娘のミシン台とたんすが一棹あるきりのわびしい暮しかただった。どうしてこんなにガランとしているのかと思ったが、それはみんな湯川氏が硫黄発見に入れこんでしまうのだった。た

またまとまりにいった時、祖父が帰ってきたりすると、妙な風躰をした男がぞろぞろくるので嫌でならなかったが、家に帰って父に訊くと、父はまたかというようで、

「老爺さんまた賺されなければいいが。」

と呟やいた。彼の周囲のものも、僅少な家禄放還金をみんな老爺さんの硫黄熱のために失われてしまっているのだということを、あたしたちも段々に悟った。

なにが湯川老人をそんなに硫黄狂人にさせたか知るものがない。ともかく四十年からの彼の事業である。

重に北の方を歩いていたが小笠原島あたりにもなんのためか長くいた。山のめききは凄いほど当ったが、訓練にも工夫をつんだが、悲しいかな老爺さんの発明は、丁度お直参の株をかったのと同じようにいつも世界の年代からおくれている。強情で頑固なところが最進智識をすこしも求めようとしないで、自己流の工夫でコツコツやるのだった。そのうちに年月は十年も十五年も飛び去る。老爺さんの頭はだんだん凸凹が多く深くなって、黴がはえたようにそのくぼみに埃がたまる

——

ある時、ヒョックリと現われた湯川氏は、赤い毛布

をマントのように着て手拭で咽喉のところに結びつけていた。山籠りから急に自分の家にもゆかず長谷川氏をたずねて来たのである。いそがしい父の小閑を見ては膝をすりあわせるようにして座りこんでいた。いつも鉱山のことになると訥弁が能弁になる——というより、対手がどんなに困ろうが話をひっこませないのだ。父は他人の紛糾事件で家族に飯をたべさせているのだから、煩わしいことをきくので頭が一ぱいであったろうに、例の大木魚の顔がムズと前に出たらダニのように離れない。私は子供ながらハラハラした。父の前からはなるたけ離れているように家族は心懸けてい

る。父も子供にも小言もいわない位に離れているのに——で、私は好奇だからでもなんでもなく、なるだけ大木魚の老爺さんの顔を自分の前にもってくるようにした。一体アンポンタンは家のものから遠ざかってポカンとしてばかりいたのに、木魚の老爺さんとだけ話をするのでよっぽど妙だったかもしれない。

「おじいさんに恐山（おそれざん）へでも連れてってもらうがいい。熊とおじいさんと三人で住むんだ。」

そんな事を大人はいって笑った。

アンポンタンと湯川氏はポツンポツンと問答をはじめる。

「おじいさんの頭はどうしてこうデコボコになったの？」

「小笠原島で亀(かめ)の子の卵をあんまりたべたので、勢(せい)がついてデコボコになってしまった。」

「小笠原島の亀の子って、大きいの？」

アンポンタンは、背中に題目を彫られた大きな亀がつかまって、も一度海にはなされるとき、お酒をのませたのを覚えていて、その二尺五寸もある甲を思いうかべていた。

「そうだよ、大きな亀の子が揃って出て来て、浜の砂を掘って、ズラリと並べて卵を生んでゆくのだ。人間

はそれを盗むのだからいけないな。」

「おじいさんも盗んだの？」

「そうだよ、盗んで幾個(いくつ)も食べた。」

「なんのために食べたの？」

「長生(ながいき)をするためにさ。」

「何故(なぜ)？」

「硫黄を――質(たち)のいい硫黄を製造して――硫黄の出る山はウンと見てあるのだけれど――お前のお父さんが承知さえしてくれれば……」

おじいさんは刀豆煙管(なたまめキセル)をジュッと吸った。

「恐山(おそれざん)に熊が出るの？」

「出てくるがなんともしない。」
「どんな風にしているの？」
「紙帳とていってな、紙で張った蚊帳みたいなものを釣って寝るのだ。寒さよけにもなるしな、火を焚いておくと、熊はくるがおとなしいよ。」
私は熊の子と友達になってもいいなという気持ちになる。紙帳のことは『浅間が嶽』という、くさ双紙でおなじみになっている、星影土右衛門という月代のたった凄い男が、六部の姿で、仕込み杖をぬきかけている姿をおもいだし、大きな木魚面の、デコボコ頭の、チンチクリンの老人を凝と見詰めた。

「おじいさんは硫黄山へ何もかもつぎこんでしまったのだって？」

「出来上ればみんなを悦(よろこ)ばせるのだが——」

おじいさんは、版下を書くように、細かく綺麗(きれい)な字を帳面一ぱいに書きつけたのを出した。分らない私にも説明しようとした。四寸ばかりな算盤(そろばん)をだして幾度(いくたび)もはじいた。

老爺さんの根気に負けて、父が福島県下へ連れてゆかれたのは、磐梯山(ばんだいさん)だか吾妻山(あずまさん)だかが破裂したすぐあとだった。父はヘトヘトになって帰って来て座らない

うちにいった。
「出来るだけのことならしてやろうよ、あの年でたいした気根だ。」
あの老人が山へはいると仙人のように身軽になって、岩の上なんぞはピョンピョンと飛んでしまい、険しい個所ではスーッと消えてしまったように見えなくなる。気がつくと遥か向うでコツコツ何かやっている。さながら、人跡未踏の山奥が、生れながらの住家のようで、七十を越した人などとはとても思われない。山の案内人などの話でも老爺さんが一足踏み入れて、あるといった山に硫黄のなかったためしがなく、歩いている

と、ふと向うの山の格好を見て言いあてる。土地の者たちも神様のように言っているというのだった。

「だが、宿は温泉だといっておいて赤湯だの、ぬる湯だのと、変な板かこいの小屋へ連れていって、魚の御馳走(ごちそう)だといって、どじょうを生(なま)のまま味噌汁(おつけ)の椀(わん)へ入れられたには――」

とすっかり閉口していた。でも、どうやらこうやら父から出資させる事になって老爺さんは欣々(きんきん)と勇んだ。情にもろくって、金に無頓着(むとんじゃく)な父は、細かい計算をよく噛(か)まなかった。損徳よりもただ幾分の出資を捨る気でしたのだったろう。

老爺さんが得意になると、今まで冷笑していた親類のものが手伝い志願を申出た。自分たちも損をしただけ取りかえそうという、御直参旗本の当主や子や孫である。

梅干幾樽、沢庵幾樽、寝具類幾行李——種々な荷物が送られた。御直参氏たちは三河島の菜漬がなければ困るという連中であるから、行くとすぐに一人ずつ一人ずつ落伍して帰って来てしまった。そして言うことはおなじだった。

「何しろ、一鍬いれるとプンと強く硫黄が匂うのだから、胸が苦しくって飯も食えない。」

老爺さんの硫黄はよく出来た。しかし近間の山林は官林なので、民有林から伐木（ばつぼく）して薪（まき）を運ぶのに、嶮岨（けんそ）な峰を牛の背でやった。製煉（せいれん）された硫黄も汽車の便がある土地まで牛や馬が運んだ。東京や横浜へ送られると、運賃と相殺（そうさい）でフイになってしまう。

その後も幾度か繰返された失敗のあとで、晩年を湯川氏夫妻は長谷川氏に引きとられた。八十を越しても硫黄の熱は燃（もえ）ていた。小さい机にしがみついたまま、贅沢（ぜいたく）は身の毒になると、蛍火（ほたるび）の火鉢に手をかざし、毛布（ケット）を着て座っていた。例により珠算（たまざん）と、細かい字と、

硫黄の標本をつくったり、種々にして手に入れる硫黄の一つまみを燃したり製煉したりして、庭隅に小さな釜をこしらえたりして首をひねっていた。その頃は父も閑散(かんさん)な身となって佃島(つくだじま)にすんで土いじりをしていたので、一所に植木いじりはしていたが――たまたま粋(いき)な客などが来て、海にむかった室で昼間の一酔(いっすい)に八十翁もよばれてほろよいになると、とてもよい声で、哥沢(うたざわ)の「白酒(しろざけ)」を、素人(しろうと)にはめずらしい唄(うた)いぶりをした。もう大人になっていた私が吃驚(びっくり)すると、老人の老妻は得意で、

「おじいさんは、お金を湯水のようにつかった、いき

な人ですよ。」

と彼女も小声で嬉しそうに口の中で何か唄った。

「おじいさんには面白いおはなしもございますのさ。

私がね、誰かの初(はつ)のお節句のおり、神田へ買ものにゆきますとね、前の方に、粋(いき)な女たちにとりまかれて賑かにゆく人がありますのでね、おやおや、何処(どこ)の大尽(だいじん)かと見ますとね。小(ちい)っぽけな旦那(だんな)で、黒ちりめんの羽織で、お刀がチョコンと突っぱって、その風采(ようす)のみっともなさってったら、あたくしが吹きだしますとね、その人が後を振りむきましたのですよ、どうもあの老爺(おじい)さんに違いないのですが、あたくしもよく似た人

があるものだと思って感心いたしましたが……」

クスクスおばあさんは笑った。その結果がふるっている。

「よくまあ、あんな綺麗(きれい)な粋な女が惚(ほ)れたものでございますねえ。」

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店
　1983（昭和58）年8月16日第1刷発行
　　2000（平成12）年8月17日第6刷発行
底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房
　1935（昭和10）年刊行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：松永正敏
2003年7月4日作成
青空文庫作成ファイル：